

この本の出版は華中科技大学2012年度大学院教育改革プロジェクトの助成を受けています

近代日本研究の方法的基礎

ハーバート・ノーマンをモデルとする イデオロギー分析概論と演習

前野佳彦 著 王閏梅 監修 許時嘉 事項注

ハーバート・ノーマンをモデルとする
イデオロギー分析概論と演習

この本の出版は華中科技大学2012年度大学院教育改革プロジェクトの助成を受けています

近代日本研究の方法的基礎

ハーバート・ノーマンをモデルとする
イデオロギー分析概論と演習

前野佳彦 著 王閏梅 監修 許時嘉 事項注

常州大学图书馆藏



武汉大学出版社
WUHAN UNIVERSITY PRESS

图书在版编目(CIP)数据

近代日本研究の方法的基礎/前野佳彦著;王閏梅監修;許時嘉事項注.
—武汉:武汉大学出版社,2013.6

ISBN 978-7-307-10836-3

I. 近… II. ①前… ②王… ③许… III. 文化研究—研究方法—日本—研究生—教材—日文 IV. G131.3-3

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2013)第 105327 号

责任编辑:谢群英 吴鲁鄂

责任校对:刘 欣

版式设计:韩闻锦

出版发行:武汉大学出版社 (430072 武昌 珞珈山)

(电子邮件:cbs22@whu.edu.cn 网址:www.wdp.com.cn)

印刷:湖北睿智印务有限公司

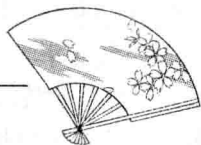
开本:787×1092 1/16 印张:13.5 字数:331千字 插页:1

版次:2013年6月第1版 2013年6月第1次印刷

ISBN 978-7-307-10836-3 定价:26.00元

版权所有,不得翻印;凡购买我社的图书,如有质量问题,请与当地图书销售部门联系调换。

解 题



首先简单地介绍一下作者前野佳彦。前野老师为东京大学、德国斯图加特大学博士，留学于英国伦敦大学附属瓦尔堡研究所(Warburg Institute)，期间师从 Heinz Schlaffer 教授、贡布里希教授，曾任职于日本东京大学和学习院大学，1993 年、1994 年、1995 年连续在东京举办过三次个人画展。专著有 *Der Begriff der Kultur bei Warburg, Nietzsche und Burckhardt*, Königstein/Ts., Hein Verlag bei Athenäum(这是前野老师的博士论文，目前被国际学术界列为研究瓦尔堡(Warburg)、尼采和雅各·布克哈特(Jacob Burckhardt)的基础文献)，《东洋的专制与异化——民众文化史的制度批判》(1987 年)，《语言符号系与主体——一般文化学的注释性止观》(言丛社，2006 年)，《散步的文化学》1, 2(法政大学出版社，2009 年)，《事件的现象学》1, 2(法政大学出版社，2009 年)，《中世的阿修罗与生死辩证法》(法政大学出版社，2011 年)。经典译著有华尔特·伯克特《屠戮者：古希腊祭祀仪式与神话的人类学》(Walter Burkert, *Homo Necans. Interpretationen altgriechischer Opferriten und Mythen*. Berlin 1972, 法政大学出版社，2008 年)，弗朗切斯·艾米莉娅·耶兹(Frances Amelia Yates)《乔尔达诺·布鲁诺及其赫尔墨斯传统》(工作舍，2010 年)，雅可布·冯·岳克斯库尔(Jakob Johann Baron von Uexküll)《动物的环境与内在世界》(*Umwelt und Innenwelt der Tiere*, 1921, Verlag von Julius Springer, Berlin, みすず书房，2012 年)等。

初次接触前野佳彦老师是在 2004 年暑假和另外两名同学一起到导师的位于群馬县浅间山麓的别墅学习。当时我在名古屋大学读硕士二年级，后来陆陆续续的老师每年都会下山到名古屋来个两次左右，为我们准备两场内容极其丰富且深刻的讲座。其实在 2006 年夏天开始，我们几个博士生便在导师的带领下一起研读前野老师的《语言符号系与主体——一般文化学的注释性止观》。但是苦于理论背景知识的严重不足，以及对文化学研究方面的方法论还没有掌握，所以对这本书的解读过程非常痛苦。导师也是意识到了这一点，觉得为我们这些文化学研究方向的博士生和研究生建构一个文化学研究的方法论尤为重要。由此就有了前野老师提案的“文化记号塾”的产生。

有关文化记号塾的产生背景，前野老师在导论中有所涉及，即此机构完全是两位老师出于想要在科研上帮助来自中国大陆的留学生，如何掌握基本的研究方法。老师给出的第一批阅读文献有诺曼·赫伯特(Edgerton Herbert Norman)的《日本近代国家的成立》(中译本名为《明治维新史》)、罗兰·巴特的《物语的构造分析》、马克斯·韦伯的《新教伦理和资本主义精神》、神岛二郎的《近代日本的精神构造》等。以后每年虽然都会加入新的文献，但是诺曼和韦伯的两本一直都排在前面，可见老师对这两本书的重视，同时也说明这

两本书对我们的博士论文写作的确起到了深远的影响。

2012年，我在华中科技大学外国语学院担任的《日本文化学研究》课程申请了研究生高水平国际化课程建设项目，得以邀请前野佳彦老师参与课程的共同授课。老师便将在文化记号塾中已经应用的非常成熟的诺曼《日本近代国家的成立》作为研究范例，为武汉地区的青年教师和研究生们从日本研究的内容和意识形态分析的方法论两个方面进行了全面系统的解读和讲授。

目前国内日语专业研究生教学中普遍面临的一个非常严峻的问题就是日本文化研究的相关教材的严重缺失或者有失全面，以及日本文化研究方法论的尚未确立。而日本文化研究是继传统的日语教育学研究、日语语言学研究和日本文学研究之后，日语专业研究生教学的一个极其重要的发展方向。鉴于这个情况，尽快开发日本文化学研究方面的教材，特别是方法论方面的教材显得尤为重要。

考虑到上述问题，前野老师将此次研究生高水平国际化课程的授课讲义进行重新整理后写成本书。本书的主要目标就是通过对一个具体研究案例进行分析，为日语专业以及其他专业致力于日本文化学研究方向的学生确立一个基本的研究方法。

诺曼·赫伯特的《日本近代国家的成立》，长期以来一直被列为研究日本近代的范例性经典名著。此书不仅在日本近代研究中占据中心位置，而且它那卓越的研究方法在指导学生拓宽专业研究视野方面也起着巨大的作用。这主要表现在诺曼运用马克思唯物史观进行意识形态分析的杰出表现上。在日本，这本书长年作为文化研究方向研究生和博士生的基本教材。本教材正是出于从日本近代文化研究的内容和意识形态分析的方法论这两个方面的考虑，选择诺曼·赫伯特的这本经典著作作为研究范例试图为大家建构一个近代日本研究的方法性基础。

在对研究生的教学中，引导学生怎样做研究是首要任务，因此为学生树立起基本的研究方法显得尤为重要。而文化研究的基本方法大体可以分为意识形态分析法、社会精神（伦理）分析法和文本分析法这三大类。这些方法当然也适用于日本文化学领域的研究。诺曼·赫伯特的这本经典著作就是将马克思的唯物辩证法的意识形态分析法运用到日本研究的经典范例。其中心命题是诺曼在开篇提出的由于上层建筑（集权国家）向下层建筑（资本主义体制）进行的主体性介入，从而导致日本出现了一个独特的近代体制。诺曼的这一独特视点为广大研究日本近代的学者以及有志于做近代研究的学者提供了一个基本的研究视角。当然我们从现代的学术状况出发，这里还有值得我们作进一步挖掘的空间。那就是他在本书中表现出的社会精神（伦理）分析方面的严重不足。

如果我们把马克思的《资本论》第一卷视为意识形态分析法的典型范例，马克斯·韦伯的《新教伦理和资本主义精神》则可视为社会精神（伦理）分析法方面的经典著作，而罗兰·巴特的可视为文本分析法的典范，那么从这些方法论来看，诺曼在其著作中很明显地使用了马克思的研究方法。虽然其中也夹杂了一点社会精神（伦理）的分析手法，但尚显缺失。特别是在分析阶级集团的主体性方面表现出严重的不足。而在文本分析方面，主要表现在对经济统计类资料的有效分析利用以及对外交资料的极其精准的宏观把握（例如第二章第二节）。

故著者在本教材的书写过程中，一方面循循善诱我们如何学习诺曼的长处，即马克思唯物辩证法的意识形态分析法的根本，同时将其不足之处用马克斯·韦伯的社会精神（伦理）分析法进行讨论练习。另一方面教我们在面对具体研究问题时，如何确立适合自己的

研究方法。这时候首先要注意的问题就是要时刻留意意识形态与社会精神(伦理)之间的本质联系。即①要检验诺曼运用的意识形态分析法的特性,②同时如何批判性地看待诺曼运用的社会精神(伦理)分析法。实际上,诺曼在成功运用意识形态分析法的同时,在社会精神(伦理)分析方面存在明显不足。所以他在分析明治维新以及日本的近代化进程时,其研究视角受到这个研究方法的很大束缚。当然,诺曼对下级武士、农民、地主等这些明治维新及日本近代化的当事人各自的社会精神领域也有所涉及,但还是缺乏一针见血的深入洞察,故而在本书中,如何引导大家对前人进行批判性的继承具有很大意义。

当然除了研究方法很值得我们学习之外,诺曼的这本著作同时是研究明治维新和日本近代国家成立史的经典。我们必须将其活用到我们自己的日本近代研究或者更广泛的近代文化研究中。对这方面的摸索有别于方法论的学习,首先是在对内容的把握上。把握内容的方法和讨论方法论的方法存在二次性、三次性的差异。故而著者在本书的书写过程中还适量地加入了一些其他的一手资料进行了有效补充。

具体的实施方法就是将诺曼对日本明治维新的研究场景展现出来,同时也将著者的研究场景展现出来。著者的研究场景又分为两部分,一部分是著者自身对明治维新的研究与思考,另一部分是著者对诺曼的明治维新观的批判。也就是说,让大家认识到对于同一研究对象(例如对明治维新以及日本的近代化的强烈兴趣),诺曼、著者以及本书的读者,还有我们大家处在同一地平线上。著者正是通过展示这样两个研究场景,以期让我们掌握一种公正的批判性研究态度。而对经典研究的内容进行把握往往不是一件容易的事情。这里著者为我们提出了一个基本方法,其主要内容有以下三点:①留意基本概念;②留意根本命题(这些命题大多集中在一些单一句子中);③收集几个根本命题后,对其相互间的理论关联进行图式化分析。这三点是紧密联系在一起的,具体操作是首先抽出一个中心命题,然后找出此命题中的基本概念,再以此为线索对命题进行整体性理论分析,即对研究的中心论旨进行再构建。这个再构建过程的顺利进行,即可视为我们已经成功地掌握了其研究内容。这个艰难的过程其实也是一个创造(创新)性的过程,而著者提醒我们如何在此过程中时刻保持解读的主体性。

此书的出版不仅能有效缓解日语系研究生教学中日本文化研究领域教材匮乏的现状,更重要的是能够为这个领域确立一个明确的研究方法。而这个方法不仅适用于日本近代研究领域,同时也适用于一般文化研究。此书不仅适用于研究生阶段教学,对文化学研究领域博士生教学亦有很大帮助。

此书从策划到出版均得到华中科技大学外国语学院王秋华教授的大力支持与帮助,在此表示由衷的谢意!出版过程中有幸得到华中科技大学外国语学院陈新丽老师以及武汉大学出版社谢群英编审的鼎力帮助,在此一并致以诚挚的谢意!

王闰梅

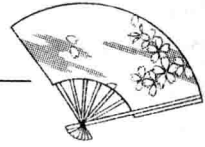
2013年5月于武汉



目 次

はじめに	1
序論 近代研究の方法概観	5
§ 1. ノーマンの『日本における近代国家の成立』を通じて近代研究の方法を学ぶことの意味	5
§ 2. 近代人文学の史的背景——事実と概念の連結の経験的根拠	6
§ 3. 文化の布置——ブルクハルト、マルクス、ウェーバー	13
§ 4. 文化学の方法——イデオロギー分析、エートス分析、テキスト分析	18
§ 5. 近代研究の方法的基礎の構築——古典の活用方法論錬磨のための古典	27
§ 6. 序論の演習課題	37
第一章 古典読解のための予備作業モデル (ノーエン、序および序論)	39
§ 1. 古典への方法的接近——予備作業の意味	39
§ 2. 予備作業1——著者の伝記的事実からのコンテキスト構築	40
§ 3. 予備作業2——年表による時代背景構築	42
§ 4. 予備作業3——主たる歴史人物からの維新史概観	45
§ 5. 予備作業4——前近代と近代の二項対立とその維新的発現型 = 「一身二生」	51
§ 6. 予備作業5——学説史的背景の構築→先端的問題の抽出	54
§ 7. 参考資料の同時進行的組織——一次資料および方法論資料	62
§ 8. 第一章の演習課題(予備作業を廻る問題)	64
第二章 基本テーゼの抽出と全体の構成 (ノーマン第二章)	66
§ 1. 基本テーゼの抽出方法	66
§ 2. 基本テーゼと全体の構成の把握	70
§ 3. 速度のテーゼ——勝海舟の「国家主義」および漱石の「外発的開化」	76

§ 4. 演習課題——二章の中心的テーゼの解析	84
第三章 階級分析の方法	
(ノーマン第三章)	87
§ 1. 下級武士と江戸商人の階級的連合	87
§ 2. 階級の社会的機能——細分化と平準化の弁証法	94
§ 3. 幕末の階級混淆——「連合」との差異	103
§ 4. 演習課題——第三章の中心的テーゼの解析	109
第四章 下部構造分析の方法(1)——工業化	
(ノーマン第四章)	111
§ 1. 階級と下部構造の照応	111
§ 2. マルクスのモデルとマニファクチュア問題	116
§ 3. 産業構造の歪み——軍産共同体の先取り	121
§ 4. 演習課題——第四章の中心的テーゼの解析	125
第五章 下部構造分析の方法(2)——農村の崩壊	
(ノーマン第五章)	128
§ 1. 近代日本の病理——農村共同体崩壊の根幹的問題	128
§ 2. 農民階級の二面性——幕末、維新初期の一揆	137
§ 3. 地租改正と近代寄生地主制の発生——農村大崩壊の起動因	140
§ 4. 演習課題——第五章の中心的テーゼの解析	154
第六章 公共性分析の前提	
(ノーマン第六章)	157
§ 1. ノーマンの政治意識分析の限界 = 西洋モデルの限界	157
§ 2. エートス現象としての公共性——その分析方法	160
§ 3. 士大夫的公共性——前近代的基底と近代的転形	170
§ 4. 村落自治と義人——田中正造	176
§ 5. 演習課題——第六章の中心テーゼに関して	181
近代日本研究の方法的基礎——原註	183
事項注	193
前野佳彦略歴	207



はじめに

本書は、近代日本研究の古典としてまず第一に推すべきハーバート・ノーマンの主著、『日本における近代国家の成立』(*Japan's Emergence as a Modern State: Political and Economic Problems of the Meiji Period*, 1940)を素材として、イデオロギー分析の基礎を学ぼうとするものである。具体的には学部上学年から大学院修士課程程度の概論演習素材を意図して構成されているが、その目的は二つある。それは、

1. 近代日本研究そのものの基礎の構築
2. 近代イデオロギー研究一般のための方法論の習得

であり、1はつまりは明治維新のイデオロギー分析を主題とした本書に沿って、近代日本の基礎を築いた明治維新そのものを概観するということであり、2はその分析の手法、すなわちノーマンの拠って立つマルクス主義的唯物史観からの近代イデオロギー分析の方法そのものを批判的に検討し、われわれ自らの近代研究の方法的錬磨のために役立てることにある。

要約すれば本書は、ノーマンの近代日本研究を内容と方法の両面から検討することによって、われわれ自身の近代研究の内容面、方法面での導入を果たそうとするものである。

本書は、中国武漢の华中科技大学で筆者が2012年9月に行った大学院向けの集中講義を基として加筆修正したものが基礎となっているが、こうした教材が特に博論を目指す大学院での専門的研究の導入期において不可欠であることを筆者が自覚したのはこのゼミの十年以上前まで遡る。この経緯は筆者が現在主宰する博論指導のための私設研究所〈文化記号塾〉(<http://bunkakigoujyuku.org/index.asp>)の沿革とも関連しているので、この間の事情を簡単に述べておくことは、本書の企画の意図そのものの理解にとっても資するところがあるように感じる。したがって以下、そのあらましのみ略述してみたい。

文化記号塾は当初、アジア、とりわけ大陸中国からの留学生の支援を目的とし、その中でも特に博論を目指す留学生たちの研究支援のヴォランティア組織としてその活動を開始した。元々留学生諸君はモチベーションも高く、また基礎的な能力にも不足はなかったのだが、ほとんどすべての留学生が二つの共通する悩みを持っていた。それは、①対象の選択、および、②方法論の習得の二点である。いずれも博論という専門研究の入

口を前にして、その専門性を充たすための基準を廻る悩みであり、両者は内奥では②の方法論へと収斂していた。正しい方法論の習得がつまりは正しい対象の設定を可能にするものだからである。わたし個人は博論以来(Yoshihiko MAIKUMA [MAENO], *Der Begriff der Kultur bei Warburg, Nietzsche und Burckhardt*, Hain bei Athenäum, Königstein/Ts., 1985)文化理論および文化哲学を専門としており、若書きの博論が国際的に評価されたことにはやや面はゆい面もあったが、ともかく文化研究の方法論に関しては一定水準以上の研究を持続してきた自覚はあった。そこで留学生諸君の苦境を見かねて、わたしの専門知識を応用し、特に方法論習得のための組織的指導を行ってみることにしたのである。幸い私塾は好成績を上げ始め、数年の予備的活動を経て2007年には正式な組織体としてHPを立ち上げ、2012年度からは研究会誌『文化記号研究』を創刊して現在に至っている。大体年に一人以上の博士号取得者を生み、それもただたんに学位を修得するというレベルではなく、博論審査で高い評価を得る成果も珍しくないから、小さな私的研究体としては成功したと言ってよいように思う。今回の概論企画も、元々はこの記号塾で博論指導の基軸にしていたノーマン・ゼミ(HPを活用したインターネット・ゼミ)での経験を基にして、さらにそれを組織化した側面を持ち、塾での成功体験をより広汎な領域へと媒介しようとする意図が根本にある。

博論以上の専門研究を行うための方法論は大別して、イデオロギー分析、エートス分析(文化社会学的分析)、テキスト分析の三範疇に分岐する(本書序論参照)。ノーマンの本著はマルクスから学んだ唯物弁証法的イデオロギー分析を日本近代研究に適用した古典的業績であり、いまだにこの分野での最高水準を誇ると言って過言ではない。中心的なテーゼは冒頭で示されるように、上部構造(集権的国家)の下部構造(資本主義体制)への主体的介入が日本固有の近代的制度を創出したというノーマン独自の視点で、それ自体として日本近代研究、あるいは近代研究一般に志す学人にとっていまだに基準的視座を提供するが、もちろんわれわれ現代人の学問状況からして、さらに先を目指すべき領域もあることは確かである。わたしの文化記号塾の方法論ゼミの基軸から言えば、イデオロギー分析の規範はマルクスの『資本論第一巻』を用いて教授を行い、エートス分析の基準はウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を用いて最も基本的な基軸を呈示することを心懸け、テキスト分析の手法は主にバルト、アウエルバッハを規範としてきた。こうした方法論全般の側面からは、ノーマンははっきりとマルクスの方法に準拠する反面、特に階級集団の主体性の分析においてエートスへの目配りが欠如するという傾向が見られる。したがって本書では、ノーマンの特性であるマルクスのイデオロギー分析の基本を学びつつ、やや足りないウェーバー的なエートス分析もゼミ討論の課題として呈示し、習得してもらうことを目指した。

こうした背景から生まれた本書であるから、その履歴は全体の構成にも反映している。その点を簡単に説明しておこう。

本書の目的は上述したように日本近代の入口である明治維新の概観、およびその研究方法としてのイデオロギー分析の習得だが、学生の研究の現場に即して言えば、方法論が要諦である。それは初学者がまず大きな困難を感じる分野だからである。その点を考慮して、特に近代研究をターゲットとした方法論の概観をまず序論として行っておくこ

とにした。もちろんここでもノーマンの本著に対する示唆、参照は適宜行っている。本論に入ってからノーマンの章立てに従ったが、まずそのイデオロギー分析の方法をモデル化することを主眼としたから、方法的範疇に従って章題を選択してある。さらに明治維新史の背景、維新研究のノーマン以降の流れも適宜補填していくことにした。したがってノーマンの実体的歴史研究(維新史研究)とそのためのイデオロギー分析(近代研究の方法論)は前者が顕在的(テキストにはっきりと顕れる)、後者が潜在的(テキストを背景から支える)であるのに対して、本書においては、実体的歴史研究は潜在的(外枠と背景の補填)、方法論は顕在的であるという鏡像的な逆転関係が自然に生じている。つまり図示すれば図1のようになるが、その本来の意図はノーマンの主著と本書を併用することによって、日本近代研究への方法論的、そして実体的な導入を果たそうとすることにある。この意図に沿ってさらに各章毎に演習問題を付加したが、これも維新史のマクロ概観とイデオロギー分析(およびエートス分析)という、実体と方法の双方を包含するように心懸けてある。しかし演習はあくまで本文理解の一助であるから、教授者の意図に沿って取捨選択して頂ければ結構かと思う。つまり本書は講義概論の主教材、副教材としての使用も、あるいはゼミ演習の教材としての使用も可能である。

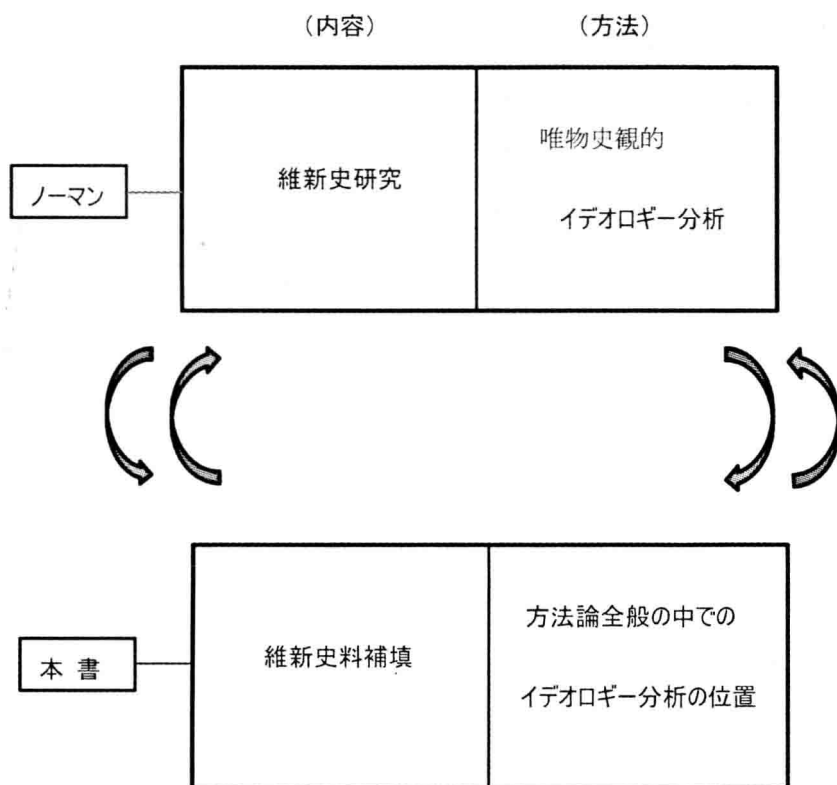


図1 ノーマンと本書の補完関係

本書はさしあたりは学部上級生、大学院修士課程程度の概論、演習教材を企図したもののだが、その根本の意図は上述したように、博論のための研究へのスムーズな導入とい

うことにある。つまり本書学習以降も、しばしばその成果をさらなる研究の進展に活かして頂くことがあくまで本意であり、その点がやや他の学習教材とは異なるのではないかと思う。学生諸君、教授者各位がこの筆者の意図を汲んで、本書を十全に活用されて頂ければと願っている。

本書の直接の機縁は、筆者が親しくその博論を指導した華中科技大学の王閏梅准教授が、自身の担当する国際交流ゼミナールの講演者として筆者を招聘して下さったことに端を発している。このゼミには筆者の主宰する記号塾の塾生、北方民族大学専任講師王曉剛君、台湾中央研究院ポストドクター許時嘉さんも助手として参加して下さい大活躍して頂いた。筆者にとっては何気なく始めたささやかなヴォランティア活動が、十年を経て大きな果実を大陸の大地に生みつつある、そのたのしくも心温まる思いで一杯であった。あらためて王閏梅氏、王曉剛氏、許時嘉氏の三氏に心からの謝意を表したい。また華中科技大学の学生諸君も、かなり高度かつ難解な内容にしっかりとチャレンジし、ゼミ演習では堂々と自説を展開する学生も多く、筆者にとっても再度大陸中国の人材の豊富さ、これからの人文研究の大きな未来を予見させる、非常に有意義な体験となった。本書執筆に際しても学生諸君からのコメントを想起することがままあり、その意味でも学生諸君の協力に感謝しておきたい。

国際交流全般も、またその一場面である日中交流も、確実に新たな段階へと進展しつつある。その大きな潮流の中で、本書を学ぶ学生諸君の中から、本質的な深みを備えた本格人文研究を目指す若きアジアの学究たちが続々と育つことを願ってやまない。

2012年10月
日本群馬山中にて
著者しるす



序論 近代研究の方法概観

§ 1. ノーマンの『日本における近代国家の成立』を通じて近代研究の方法を学ぶことの意味

ハーバート・ノーマンの『日本における近代国家の成立』**1**は、日本近代研究の古典として、長くその評価が確立された名著である。その古典性は以下の四点に収斂する。

- ①明治維新という近代日本の出発点を廻る制度の構造転換をマクロに概観したこと。
- ②日本近代国家の成立を資本主義体制への急転換と、絶対主義的専制体制の構築という両面から分析記述したこと(下部構造転換+上部構造イデオロギーの構築)。
- ③外圧(列強の植民地化圧力)と内在的変革の弁証法的相互浸潤を明確に検証したこと。
- ④階級分析の手法により、集団の構造的ダイナミズムを記述することに成功したこと。

これは対象の内実という面からの古典性だが、さらに本書にははっきりとした方法論的自覚が見られ、その点でもわれわれに多くの示唆を与える。その意味での方法論的基軸は三つある。

1. 実証的資料の掘り起こしと範疇化(立論のための整序)を高い水準で実現している。特に経済資料、統計の処理(ノーマン**2**、84-85頁)と、外交資料のマクロ分析(第二章第二節)は見事である。
2. 史的唯物論の分析手法を用いて、日本近代の制度史、社会史を概観することに成功している。つまりオーソドックスに唯物史観的な見地から、下部構造(経済構造)分析と上部構造(制度+イデオロギー)の相互規定関係を検証している。
3. 記述の面では、近代的史学の展開を規定した二律背反、個⇔集団(民族、国家、階級)に等分に目配りし、個別のイデオログと集団の主体的歴史性の相互浸潤を検証しつつ、マクロの史的概観を可能にしている。

この方法論的基軸をさらに要約すれば、

- (1) 近代的実証主義
- (2) 史的唯物論に拠るイデオロギー分析
- (3) 近代史学的マクロ記述(個と集団の弁証法を内実とする)

となり、いずれも近代人が足元の歴史現象に対峙しようとして蓄積してきた方法論を背景に持つことが分かる。(3)に関しては、特に西洋史学の研鑽を経たノーマンが、近代史学の根幹であるランケ、ブルクハルト以来のマクロ概観、マクロ記述を正統的に継承していることに注目しておきたい³。つまりノーマンの本著は、近代日本研究の古典であることを超えて、近代研究そのものの方法論を高度の水準で呈示した、方法論の古典でもある。その内部構造をさらに詳しく見てみるならば、(1)の実証主義が(2)のイデオロギー分析へと収斂し、さらにそれが(3)の実践的なテキスト構築(記述)へと連関する、という有機的な即自(事実)→対自(理論)→即対自(テキスト)の主体的運動が観察されるが、それこそまさに近現代人が歴史状況の中で冷静に自己定位しようと欲する際の、一般的かつ普遍的な思考と思想のモデルに他ならない。つまりその意味で、ノーマンはやはり近現代人として、状況一般の中で、学問的方法という基準を用いつつ、自己定位を行おうとする、対自としてのわれわれの先達でもある。

こうした研究対象を超えた、一般的方法論の側面での一種の「仲間」意識をノーマンに対して持つならば、その方法の検討を介して見えてくるものこそが、まさにわれわれ自身の近代研究にとっての大きな示唆を与えることが確認できる。本書ではしたがって、まずノーマンが準拠した近代史学の方法論的位置を、さらに大きなコンテキスト、つまり一般文化学的文脈からの近代研究とはどのような方法論的基軸を守るべきか、という最広義の方法論から捉え直してみたい。いわばノーマンが明治国家について論じることにより耳を傾ける際に、同時に彼の仕事場をも覗き、彼がどのようなハサミと糊を用いて資料を整理したのか、どのようなモデルに従って理論構築を行ったのか、どのような格率に従って記述したのか、つまりどのような方法によって、自らの近代日本論を構築したのかというその方法論に着目しておきたいのである。それは当然、われわれ自身が学人として仕事場でいかなる方法に準拠して自らの対自世界を展開するべきか、という一人一人の焦眉の問題に直結する。思想的、研究的展開もテキスト構築という意味では「物づくり」であるから、工房の職人技芸家同様、具体的な仕事にかかる前に、仕事場を整えねばならない。そのためにはまず「生産的かつ客観的な方法はいかにして習得されるべきか」という基本問題を立て、自らの方法論を研磨する必要がある。こうした一般的な観点から、ノーマンの本書と向きあいつつ、まずわれわれ自身の置かれた学問状況、特にその方法論的側面を概観してみたい。

§ 2. 近代人文学の史的背景——事実と概念の連結の経験的根拠

われわれは、近現代的な状況下での人文学研究者である。この命題はすでに「近現代的な状況」と、「人文学」(the humanities)という二つの契機を内包している。この後者の「人文学」の契機を最広義に設定した場合、それは「一般文化学」(die allgemeine Kulturwissenschaft)⁴の理念へと収斂する。つまりそれは集団間の偏差を超越した「人間普

遍的な契機」を探究の最終目的とする。しかしまたそのためには個別の集団の特性を明確に検証することが何よりも重要な前提となる。ここには非常にオーソドックスな形で、個⇔普遍をめぐる基本的な弁証法が発現している。人間性の普遍へいたるためには、まずその普遍が具体的に外化した個物を検証するしかない。しかしその個別性の了解には全体性、普遍性への視界が不可欠である。この弁証法的相互関連に目配りする中道の視座こそが、近代人文学の王道であると要約できる。したがって、近現代人として人文学を目指すわれわれも、なによりもまずこの基本的な方法的前提に留意する必要がある。「一般」、「普遍」、「人間」はもちろん人文学の最重要の検証課題だが、同時に個別の事実を実証的に丹念に収集し整理することを行わねば、空虚な机上の観念構築に終わる。つまりそれは宋学や「道学」、あるいは中世的神道の形而上的観念性へと先祖帰りしてしまう。この先祖帰りの忌避、その徹底的な根こぎがわれわれ近現代的対自の第一の格率となる。それはつまりはオーソドックスな「実証性」の尊重、実証研究の実践ということである(上掲§1の(1)の契機)。

実証研究とは端的に言って「事実」の尊重、「事実」との対峙をすべての検証の出発点とするという探求者の決意に他ならない。それが一つの「方法」であることに最大の注意を払わなければならない。より正確に言えば、それは「近代的方法」の原点の一つである。そしてこの実証的方法は、自然科学と人文科学の両者を包摂する。自然科学における、ベーコン以来の実験による検証と、人文科学における文献批判の精神は、その近代性において通底している⁵。両者はともに「事実」を最終的な拠り所とするからである。人類史的な背景を加味して考えるならば、魔術、神話との親近性を示す新石器革命の基体となった「具体の科学」(la science du concret)⁶と、近代において機械情報革命の基体として展開する「実験の科学」とは、人間がもともと有する二つの事実観念、二つの経験概念を基礎としており、前者においては「事実による検証」という本質的なフィード・バック機構が決定的に欠如していたことに注意しなければならない。この意味でわれわれ近現代人の行う人文学は、根本的に事実検証的(経験検証的)であり、かつ「魔術からの解放」(Entzauberung——マックス・ウェーバー)⁷を内実とする。こうしたことはもう常識としてわれわれ学人の血肉と化しているように思えるかもしれないが、その実、実際の研究の進展においてはまさにこの「事実認識」を廻ってフィード・バック的検証を忘れた曖昧模糊たる現実認識への転落が非常にしばしば生じるのが現実である。したがって、まず何よりもこの点に注意しておく必要があるのである。比喩的に言うならば、われわれ学人の裡にも「未開人」は棲息しており、実際にその「未開の思考」のエネルギーは学問のエネルギー源ともなりうるのだが、それを近現代的な「事実認識」によって統御することが肝要である。この統御を忘れた学問は魔術、呪術へと転落する危険をつねに孕んでいる。

「近代的方法」のもう一つの原点、それは「理論構築」である。その理論は机上の空論ではなく、事実によって不断に検証されるべきもので、精確に表現するならば、カントの意味での「経験範疇」を内実としている(『純粋理性批判』参照)。検証の基体としての「事実」と、経験の基軸としての「理論」が密接に相互関連したところに、すべての近代的対自の歩みの原点がある。これもまた自然科学、人文科学に共通する契機である。そ

の意味でノーマンにおける実証精神(上掲 §1の(1))と、理論的先鋭性(上掲 §1の(2))との連結もまた、彼の特異性、オリジナリティというよりは、逆に近代的対自そのものの普遍的特性を、日本近代研究という具体的な営為において実現している、と見るべきである。

そして最後にもう一つの方法的原点、「記述」の問題がある。近代人文学にはつねに「記述」を廻る問題が影のように付きまどってきた。これはやがてヘーゲル、ランケ、ブルクハルトを代表とする近代史学と、特にフッサールによって創始された「超越論的現象学」、またヴィトゲンシュタインを代表とする「言語分析派」、さらにハイデガーの「実存解釈」の理念を廻る現代哲学において明確に意識され、テーマ化されることになった。要約的に概観すれば、この問題はつねに個⇄集団の弁証法に規定されている。近代的個がテキスト構築を行おうとするや否や、その媒体の集団性の問題に遭遇する、これが「記述」の問題の真相である。つまりそれは言語媒体の選択という問題を、普遍的に(普遍近代的に)発生させる。個⇄集団の二項対立は、記述という言語構築を廻っては、国語(近代語)⇄規範言語(中世的国際言語)という対立、二律背反として現象する。ノーマンにはこの問題は希薄に見えるかもしれないが、実はそうではない。本著が日本の原典資料を詳細に読み込みながら、なおかつノーマンの母国語、英語で書かれていることに注目しなければならない。それは「記述」の媒体選択が、彼においても近代的対自の大きな運命連関の上でなされていたことの証左である。

少し話が抽象的で難しいかもしれない。具体例を挙げてみよう。

近代的対自の初期のモデルは、衆目の認めるところデカルト(René Descartes, 1596—1650)の代表作『方法叙説』(*Discours de la méthode*, 1637)である。この著作はまさに「方法」の確立を廻る苦闘のあとを記録したドキュメントだが、これをデカルト哲学といった狭い観点から見のではなく、近代的対自全体の中で、この著作が生まれる必然性があったことを再度確認する必要がある。つまりそれは人間経験という「事実」を基盤として(§1の(1))、世界論という「理論」を構築しようとし(§1の(2))、そしてその媒体を学術語としてのラテン語ではなくデカルト自身のフランス語(母国語)に設定したものである(§1の(3))。つまりそのように抽象化するならば、デカルトの方法的基軸の根幹はノーマン史学のそれと過不足なく重合する。そしてもう一言言えば、われわれ自身の人文的営為とも基本的に一致する。一致せねばならない。

ではその一致はわれわれにおける「西欧化」だろうか?

けっしてそうではない。

あらゆる集団は、前近代的な母胎からの離脱によって近現代的な集団へと転生する。この転生の定位的本質、対自的中核がまさに「近代的方法」であり、デカルト→マルクス→ノーマンを結ぶラインは、一つの典型として、モデルとしての意味を有する。それは最も典型的に近現代的対自が「世界」を(デカルト)、「歴史」を(マルクス)、そして「日本近代」を(ノーマン)前にして全体的定位を行おうとする、その精神の姿勢そのものを示している。だからこそまたそれは、われわれ自身の学的精神の彫琢にとって大きな参照材料ともなりうるのである。ここでは国や民族といった個別集団間の差異を超えた、普遍的状况の前進、普遍的近現代の発現というマクロの人類史的潮流を見失わないことが重要である。つまりデカルトやマルクスやノーマンがそうであったように、われ

われもわれわれ自身の「普遍」を求めねばならない、ということでもある。

「われわれ自身の普遍」。

この標語も普遍近代的な格率であり、その中核部に強烈な弁証法的矛盾を潜在させている。つまり「われわれ自身」という個別性、実存性(偶有性)と、「われわれ自身の事実性、偶有性から抽象され、純化された普遍性」という矛盾対立を。この矛盾対立こそが、われわれ近現代人の実存的根拠であり、またその実存から発現する近現代の人文学という定位行為の本質でもあることを忘れないようにしよう。われわれという個は、一回的な「自身」と普遍を望見する「われわれ」という矛盾の中有に浮かぶ、そうした個であるということ。

ブルクハルトは、周知のごとく近代の成立をイタリア・ルネサンスの文化運動に置いた(『イタリア・ルネサンスの文化』*Die Kultur der Renaissance in Italien*, 1860.)。その最大の徴表は、「個人」が「集団」から離脱したこと、個性の自由な展開とそこに内在する自我分裂の近代的矛盾が、ルネサンス時代のイタリアにおいて始めて時代の潮流として展開したことである。

〈中世においては、意識の二面性、すなわち外的な人間と、内的な自己自身に対峙する人間とは、一つの共通のヴェールにくるまれ、あるいはうつらうつらと半眠半醒の状態にあった。そのヴェールは、共通の信仰、子供っぽい思い込み、そして妄想から織りなされていた。このヴェールを通して見ると、世界と歴史は奇妙な色合いに彩られて見えた。人間は自己を、民族、国民、党派、集団、親族として、あるいは他の一般的な範疇においてだけ認識していたのである。〉

イタリアにおいてはじめて、このヴェールに風が吹き込む。そして国家およびこの世界のあらゆる事物に関する客観的な認識と操作の方法意識が目覚める。さらにそれと並んで、およそ主観的なもののすべてが力強い産声をあげる。つまり人間は、精神的な次元での個人となり、自己を個人として自覚したのである。〉(ブルクハルト『イタリア・ルネサンスの文化』第二部〈個人の発展〉) 8

ルネサンス運動は、狭義にはたしかにヨーロッパ近代のみの現象であり、ブルクハルトもそのようなものとしてイタリア・ルネサンスにおける個人の覚醒を記述している。しかし広義にはこれもまた、近現代の普遍性を探究する「モデル」の一つである。西欧の近代はもちろんルネサンスから出発する。これは現在においても定説と言ってよい。では明確なルネサンスを持たない東洋はどうか? そこには「近代」はないのか? もちろんそんなことはない。そこにおいても「近代」は自生し、自律的に展開する。なぜならブルクハルトがイタリア・ルネサンスに見た中核的現象、個の集団からの離脱という現象が、日本近代においても、中国近代においても、はっきりと時代の徴表として大々的に顕在化しているからである。こうした観点から、たとえば花田清輝はその代表的な文化論、『復興期の精神』において(1946年)、ルネサンスを「復興期」という標語によって一般化し、洋の東西の「近代精神」の自律的展開を比較しようとした。もちろん彼の方法は文化エッセイであり、厳密な学問のそれではないが、近代論としての水準は非常に高く、今日的な見地からしても、特に「普遍的近代」を検証しようとする、検証し